一人一人の児童が自信を持って
楽しく活動できる音楽の授業
——子供たちの中にいる音楽を目指して——

足利市立柳原小学校　阿久津　浩久

1. はじめに

本校は、平成6年度、平成7年度と市教委指定の研究学校として、新しい学力観に立った授業改善を目指してきた。「一人一人が学ぶ力を付ける学習過程の在り方」という主題を掲げ、配当時数の多い国語、算数を、過去の研究を生かすよう音楽を主たる研究教科として取り組んできた。研究の指針として、

○学校教育目標の「よく考える子」を基に、学習の主体が児童であることを確認し、自らが課題を見つけ、主体的に考えたり、判断したり、表現したりし、よりよく解決することができる力を育てる授業づくりをする

○教師・児童の実態から教師主導型の授業の脱却をはかり、児童自らの能力を基本とする学力観に立った教育を目指す

○教育の今伺の課題から、基礎・基本を重視し、個性を生かす教育の充実に努め、変化の激しい現代社会に主体的に対応することができる能力の育成をはかる

ことを取り上げ、

◇教材研究の充実
◇授業実践の重視
◇学習指導の充実
を具体的な内容として、研究を進めた。

この中で、我がクラスでは音楽科において、いかに子供たちが主体的に音楽に取り組めるような授業を展開するか、いかに子供たちが音楽への抵抗がなく、むしろ楽しんで活動することができるか、そして（勉強としてでなく）いかに子供たちと音楽との距離を近づけるか、ということを児童の実態や研究との関わり、また音楽における自己発展の考え方を基に、実践し、その反省を次の実践に生かしてきた。

2. 関連した研究内容について

ここでは、本研究での音楽科における基本的な学習過程について述べることにする。次のページのものはその基本的な学習過程表である。本研究では１単位時間を基本的に4つの段階に分けて考えている。音楽では「つかむ」「あらわす」「ねりあげる」「まとめ」としているが、国語、算数は明確に4分化されているのに対し、音楽は第2段階の「あらわす」と第3段階の「ねりあげる」を明確に区別していない。これは、児童一人一人の感性や思いを大切にしたいと考え、それぞれのベースにあわせた学習活動ができるように考慮したためである。個人が自分の思いに沿って音楽活動を行う（あらわす）中、個人の深まり（ねりあげ）が行われるからである。
<table>
<thead>
<tr>
<th>教 師 の 支 援</th>
<th>児 童 の 活 動</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>○子供たちがのびのびと表現できる雰囲気をつくる。</td>
<td>○既習曲を歌う。</td>
</tr>
<tr>
<td>●歌う場所や形態を工夫する。</td>
<td>●リズムリレー・リズム問答・音あて遊び</td>
</tr>
<tr>
<td>●自ら表情豊かに歌ったり身体表現したりする。</td>
<td>○課題をつかむ。</td>
</tr>
<tr>
<td>○楽しみながら活動できるようにする。</td>
<td>●範唱（奏）を聴く。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>●イメージを広げる。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>●見通しを立てる。</td>
</tr>
</tbody>
</table>
| | ○あこがれを持つように曲の提示の仕方を工夫する。
| | ●映像・範唱・範奏 |
| ○自分なりの表現の仕方を工夫する。 | ○自分なりの表現の仕方を工夫する。 |
| ●自分の好きな音をつくる。 | ●自分の好きな音をつくる。 |
| ●自分の気持にあった音色や音量、速度などを工夫する。 | ●自分の気持にあった音色や音量、速度などを工夫する。 |
| ●身体表現を工夫する。 | ●身体表現を工夫する。 |
| ●表現の広がりを楽しむ。 | ●表現の広がりを楽しむ。 |
| (合奏・合唱の場合) | (合奏・合唱の場合) |
| ○一人一人の表現の工夫のよさを感じ取ってグループの表現の仕方を考える。 | ○一人一人の表現の工夫のよさを感じ取ってグループの表現の仕方を考える。 |
| ○友達の表現のよさに共感したり、それを認めたりする。 | ○よく聴き取るように学習場所や形態を工夫する。
| | ●活動スペースの確保 |
| | ●録音 |
| | ○ねらいあげる視点を与える。 |
| ○自分が表現をさらによいものにするように工夫する。 | ○自分が表現をさらによいものにするように工夫する。 |
| ●速度・強弱 | ●活動スペースの確保 |
| ●曲の山のとらえ方 | ●録音 |
| ○グループの表現をさらによいものにするように工夫する。 | ○グループの表現をさらによいものにするように工夫する。 |
| ○学習のまとめをする。 | ○学習のまとめをする。 |
| ●発表する。 | ●発表する。
| ●自己評価をする。 | ●自己評価をする。 |
| | ●相互評価をする。 |
| ○次時への課題をもつ。 | ○次時への課題をもつ。 |
| | ○子供の発表を称賛し、励ます。
| | ○自分の学習の状況に自ら気付くように評価カードを工夫する。 |
| | ○他の人（グループ）のよさに気付き、それを自分その学習に生かして広がりのある活動をするように助言する。 |
| | ○努力を増え次時への意欲づけをする。 |
3. 児 童 の 実 態
現在のクラスは、4月に新しく受け持ったクラスである。そこで、子供たちの実態を捉えることから始めた。
今までの研究から出されている、本校の児童の実態をあわせて考えてみると、
・男女の仲が良く、協力的である。
・よりよいものを求めたり、深めたりしようとする。
・自分の考えが出せる。
などがあげられる。また、音楽に関した実態をあげてみると、歌うことや楽器を演奏したりすることが好きで、授業以外にも全校音楽集会や朝の会、帰りの会の歌など大変意欲的に取り組んでいる。歌唱表現や、国語の音読など、自分たちの考えを表現活動に取り入れようとすることには大変興味を持って活動している。しかし、思うように活動するための表現力が身についておらず、そのために活動意欲を失ってしまうような児童もいる。このような実態から、次のような実践を行った。

4. 実 践 の 内 容
三つの授業の実践経過

（1）「ようすを思い浮かべて」8時間扱い

<table>
<thead>
<tr>
<th>指導計画1</th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>時</td>
<td>ね ら い</td>
<td>教材</td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>曲想や情景を感じとり、歌い方の工夫をすることができる。</td>
<td>山の朝</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>発声に気をつけて、響きの美しさを感じることができる。</td>
<td>白鳥</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>曲想や情景を想像しながら旋律や音色の美しさを感じ取りることができる。</td>
<td>白鳥</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>歌詞の内容を理解しフレーズを大切にして歌うことができる。</td>
<td>ままき</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>歌詞や旋律の特徴を感じとり、表現の工夫をしようとする。</td>
<td>ままき</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>よりよい曲想表現を工夫して、それを見表現しようとする。</td>
<td>本時</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>協力して、自分たちのねらいに沿って表現の工夫ができる。</td>
<td>本時</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>情景を想像しながら表情豊かに歌うことができる。</td>
<td>本時</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（本時の様子）
「まきはの朝」では、前時までの「山の朝」「白鳥」で学習した情景にあった歌い方の工夫の仕方を踏
まえて個人で工夫を考え、グループで一つの楽譜を作り上げていた。歌詞の内容や、写真でとらえたイメージ、旋律の特徴などから個人で考えた工夫を出しあい、検討しながら記号のない楽譜に歌い方の工夫を書き入れていった。同時に、「山の朝」での発声指導を元に、聞き手を決め、考えた通りに歌えるよう練習を進めねりあげを図った。

(考案)

「音楽に対する一人一人の感じ方は自由であること」
「それによって音楽は作られること」をとらえさせたせいか、自分の考えを積極的に出す様子が見られた。また、実現された考えをグループの中で整理していき、最初

の意見がよりよいものとなる「深まり」も見られた。練習においても、技術面以外の自分たちで判断できる声質やプレスなどは、聞き手を中心に練習が行われていたところもあった。

表現の工夫をするということで、楽譜や作業プリント上での話し合いは持つことができたが、肝心な音がほとんどない授業であった。また、話し合いのグループの中では、音楽的に能力の高い者が話し合いの主導権を握ってしまうところもあり、全員が主体的な音楽活動をしていたとはいえなかった。

(2) 「ひょうを感じて」7時間扱い

〈教材研究〉

この単元に入る前に簡単な調査をしてみたところ、
・知っている楽器が少ない。
・記録に関する音符、記号などの知識が乏しい。
という実態もあげられた。そこで指導計画を立てることで、子供主体の活動をする場である本時（3/7）の「リズムづくり」の前に、楽器の紹介と音符、記号に関する学習の場（基礎基本を身につける場）を位置づけた。

〈本時の様子〉

本時の展開では、前回の課題である
・能力に応じて、主体的な学習活動が行えるようにすること
・音のある授業であること

を考慮した。学習過程の第2段階（あらわす）において、個人、グループなどというように学習形態を統一せず、発音一人一人のすすむ具合や、能力にあわせて、一人で考えたり、友達と協力したり、一緒にやるという自由な形を持たせた。教師の支援も、一緒にリズムづくりのアドバイスをするだけでなく、できあがったものを代わりに演奏してあげたりするなど教師の能力を発揮一人一人の学習に最大限に生かせる
よう支援をした。

（考 察）

能力の高い者はいくつものリズム伴奏を作り上げていたし、友達と協力して作り上げている者もいた。
また、自分で考えることはできたが、演奏できない者は、できる子や教師に代わりに演奏してもらって確かめていることもあった。記録に関しても友達同士で助け合う場面が見られるなど、お互いに不得手な部分を補って、みんなが楽しめるような音楽の授業ができた。子供たちは、自分の進度ではあるが、熱心に音楽に取り組んでいた。

また、教室内に様々な楽器を配置し、子供たちが自由に使えるようにすることで、音のある授業をねらったが、やはり記録したり、頭で考えてしまうことが多く、思ったほど効果はなかった。

単元が終わって考察してみると、音符や記号など知的なのや、リズム打ちなどの演奏技術などは、すぐに身に付かなかった。音楽を行うに際して必要不可欠なものであるが故に、計画的・段階的な指導計画の検討が必要なことを実感した。

（3）「ふしぃ重ねて」8時間扱い

（教 材 研 究）

今回指導計画の導入に鑑賞教材である「きょう友」を持ってきた。「聴くこと」から入ることで、2つの音の重なりや音の重なりをとらえやすくし、少しでも関心を高めようと考えたからである。

「地球はぼくのにわ」では、和声が同じでタイプの違うフレーズを利用して、実際に自分たちで簡単な音の重なりの世界を体験させたいと考えた。

「みじ」は、ポピュラーながら対位的な音の重なりと和声的な音の重なりの美しさを感じさせる2部合唱である。なんち深いこの曲が2部合唱になることで、新しい発見と感動があり、曲想や情景による表現の工夫も取り入れながら格的な和声の響きを作り上げることで、より深い音楽の世界をつかむことができるのでは、と感じた。

「雨の公園」では、リコーダーの高音の練習も兼ねて二重奏をすることで、歌唱では難しい響き合いを感じながら演奏する喜びを味わわせようとした。

（本時の様子）

学習形態については、「個人差」の問題を配慮し、グループの人数を決めず、自分の能力を考えてメンバーを編成するようにした。音楽的に経験の深い児童は、2人でも十分だし、逆に浅い児童は、多くの友達と協力していくことで学習が成立していくと考えた。

また、少人数のグループ活動を基本とした。大勢で、1つの作品を作り上げようとすると、どうしても意見が取り合われずに終わってしまう子供もできてしまうからである。各自の思いが反映されるような環境の必要性を考え、多くても6～7人のグループとした。

学習空間については、狭いと隣のグループの音が活動の妨げになってしまうことを考え、教室を2つ用意した。また、方角の教室には、いつも「もじ」の伴奏が流れているようにし、音のある音楽の授業づくりに努めた。

本時の展開において「あらわす／ねりあげるの段階」では、子供たちが自由に活動できる時間を多く確
<table>
<thead>
<tr>
<th>時</th>
<th>ねられい</th>
<th>教材</th>
<th>主な学習活動</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>二つのふしぎの重なりに気づく。音の重なりに関心を持つ。</td>
<td>きゅう友</td>
<td>・曲を聴き、二つのふしぎの重なりをとらえる。・音の重なりによる、響きの深まりをとらえる。</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>曲の感じをとらえて歌うことができる。</td>
<td>地球はぼくのにわ</td>
<td>・曲に乗って歌い、⑧と⑨の歌い方を話し合う。・リコーダーの練習をする。</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>二つのパートの特徴をとらえ、組み合わせて演奏の工夫をすることができる。</td>
<td>⑧と⑨の曲の特徴を知り、演奏形式や、組み合わせ方を工夫して演奏する。</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>情景を想像しながら楽しげに歌うことができる。</td>
<td>もも るも</td>
<td>・歌詞の内容を理解する。・情景をとらえて歌い、歌い方の工夫を考える。</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>低声部を練習し、二部合唱による音の重なりを味わう。</td>
<td>しも みも</td>
<td>・低声部を練習し、2部合唱による音の重なりを味わう。</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>ハーモニーを考えた歌い方の工夫をする。</td>
<td>6 本時</td>
<td>・考えた工夫を元にグループで練習をする。お互いのグループを観察する。</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>グループごとの工夫を認めあうことができる。</td>
<td>グループごとに発表し、工夫した点や発表後の良い点を話し合う。</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>リコーダーの高音の出し方を見習い、曲想を考えて歌いを演奏することができる。</td>
<td>雨の公園</td>
<td>・練習壇を元に、高いミ・ファ・ソの練習をする。・曲想を考えた音の出し方を工夫し、響きを味わう。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

保すことで、一人一人（小グループ）のペースで学習を進められるようにした。また、子供たち同士の「学び合い」にも視点を当て、「見学タイム」を設けた。

「まとめめる段階」では、教材「もみじ」についての学習計画を一覧にした「学習カード」に自己評価を書いていくことで、常に本時の位置づけがわかり、次時の目当てがとれられるようにした。

(考覧)

少人数にしたグループ編成によって、子供たちは、一人一人責任を感じていたようだった。自分がきちんとやらないと、ハーモニーをねらっている今後の学習が成り立たないことを見つけていた。

歌い方の工夫においても、ほとんどの児童が自信を持って自分の意見を持ち、グループの中へ反映させていた。「まとめ」でのグループごとの発表において、大勢の観察者がいた中で、2人だけのグループが堂々と合唱（重唱）していたこともその裏表であろう。

うまく合唱ができなかった者も、「見学タイム」の他者のグループの良いところを見つけることができたようで、それぞれが自分の能力になに45分間音楽活動をすることができた。

<table>
<thead>
<tr>
<th>星見学カード☆</th>
<th>4月1日</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>月の光をかすめて見上げる姿</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>月の光をかすめて見上げる姿</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>月の光をかすめて見上げる姿</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>月の光をかすめて見上げる姿</td>
</tr>
<tr>
<td>学習過程</td>
<td>学習活動</td>
</tr>
<tr>
<td>----------</td>
<td>----------</td>
</tr>
<tr>
<td>つかむ</td>
<td>1. 「もみじ」や愛唱曲を教う。 2. 学習のめててを確認する。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>ハモニーを考えた歌い方を工夫しよう</td>
</tr>
<tr>
<td>あらわす</td>
<td>3. グループ内までの学習からの工夫と二部合唱にしての工夫をふまえグループでの歌い方の工夫をする。  ・お互いの意見を尊重して、取り入れていく。  ・話合いだけでなく実際に歌ってみながらも考えていく。  ・話し合うことがわかるように、楽譜に書き込んでいく。</td>
</tr>
<tr>
<td>ねりあげる</td>
<td>4. オーディオの歌い方の工夫が表現できるように練習する。  ・順番に聞き手を決め、意見を出しながら進める。  ・注意する点、途中で気付いた点、思いついた点はその都度、楽譜に書き入れる。  ・自分たちでできる限りは、発声面についても注意していく。（声質・発音・プレス等）  ○他のグループの見学をし、工夫している点や、参考になる点を見つける。  ○良い点を見つけたら、カードに記入しておく。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>まとめ</td>
<td>5. いくつかのグループの発表する。  ・最後まで終わらなくても練習のポイントを示し、その成果を発表する。  6. 今日の学習をぶりかえり、学習カードに反省を書く。  7. 次回の学習活動を確認する。</td>
</tr>
</tbody>
</table>
教育祭学校音楽祭への参加

今回の授業の素地作りとして、10月11日の学校音楽祭に出展した。アカペラ（無伴奏）と伴奏付きの2曲の2部合唱をやった。これまでに2度の音楽研究授業をこなしていたので、子供たちにも少しずつ音楽への自信があったようだ。彼らは、自分たちの意志で2曲を選んだ。最初は私の中で「この曲は無理ではないか」という懸念があった。しかし、子供達の意志に沿って音取りの手助けをしていった。一日目、3小節しか進まない。しかも、アカペラの方の曲は、簡単なポリフォニーなので各パート単独では、単調な曲である。音取りを進めるうち徐々に意欲がなくなっていた。「やはり・・・」と思ったが、しかし、子供達も自分たちで選んだプレイドがあるのか根をあげる者もなく、五日目、何と音を取り終えた。そして、2つのパートを初めて合わせたとき「この曲はこんなにきれいな曲だったの？」「1パートで歌っていると全然違う曲みたい。」という声があがった。「ふしが重ねて」の授業が11月9日であったが、一足先に子供たちは音の重なりを味わい、その美しさ、豊かさを感じていたようだった。

5. 成果と課題

今回の実践による成果としては、

・子供の側に立った。単元レベルでの教材研究が重要であることを実感した。（教師）

・設定された（児童の主体的な活動の場）において「自分たちでできる（やろう）」という意識（自信）が見られるようになってきた。（児童）

・子供たちが音楽を身近なものとして楽しめるようになった。（児童）

ことがあげられる。単元全体での子供の活動の場を見極め、決して教任ではなく一人一人の「個」を見つめながら、それらに対応できる柔軟な展開を設定していくことで、子供たちは自分なりの考え、レベル、方法で有意義な学習活動をすることができた。このことでも、自分の考えに自信を持てるようになった。学芸会では、4年生ながら自分たちで台本を作り、演出、衣装を考えることができた。（私は、演技指導と台本のワープロ打ちだけである。）

この自信が音楽的感性を高める礎にもなった。朝の歌、帰りの歌で今までは後姿のあるうちにパタパタと騒ぎ出していたが、いつの間にか片づけることをしなくなり、音が終わるまで耳を傾けるようになっていた。「静寂を感じることができる者は、音楽を知る者である」との言葉通り、子供たちの音楽的感性は確実に育っているようである。

また、本校の基本的な学習過程の流れが身に付きつつあることで、児童主体の授業展開に抵抗なく取り組むようになってきた。自分の持っている考えに自信を持ち、自らが問題解決の見通しを立てて自分の持っているものを基に学習活動をおこなうことができる姿は、まさに本校の研究の求める「学ぶ力」そのものである。音楽に限らず他科でもその成果は見られる。国語の説明文は、1学期に1単元あり、そのときに一通りの読む手順を学習してきた。2学期の説明文ではそのときの学習を基に、個人で要点を読みとり、グループで合わせ、意味段落を個人で考え、その後グループで考え、全体の要旨を個人で考え、グループで確認し・・・と進んでいくので、個別学習とグループ学習の時間の設定しようと思うと、子供たちから「もう少し一人でや
りたい」とか「はやくまとまったので、早速グループで確認したい」という声が出てきた。そこで、進み具合を見ながら、グループごとに学習様態を変えていくようにした。今後の研究では、国語科においては4つの学習過程を一斉に分けてとらえ、子供の選択に第2段階と第3段階を組み合わせてさらに能率的な形に発展させることもできた。子供たちは、自分たちにあった時間配分で活動できたので、大変主体的に学習できたようだった。
一方、今後の課題としては、
・学年があがるに従って広がる個人差（技能面）をどう補っていくか。
・子供の「学ぶ意欲」をどう評価していくか。
ということがあげられる。楽器演奏、歌唱のどちらにおいても一朝一夕で身に付くものではない。年間又は複数年にわたる指導計画の作成が必要となってくるだろう。評価の問題については、今後の研究の次の課題としても挙げられている大きなものであるので、それと合わせてさらに研究していきたい。

6. おわりに
音楽が存在する芸術という世界には顶上はない。また、一人一人の感性には上下はなく、全く自由であると思う。だから教科・学習としての存在というのが難しく感じるのかもしれない。しかし、私たちの生活から音楽を切り離すことはできない。子供たちにとって音楽と同じように音楽も一生つきあっていくものなのである。だから、私は、音楽を強制的に教えようとは思わない。彼らにとって人生はまだ始まったばかりなのだから、これからずっとつきあっていくものの「よさ」「すばらしさ」を伝えてあげられればいいのではないか。いい音楽に出会い、あこがれることで、彼らと音楽とのこれからとのつきあいはどんどん深まっていくのではないだろうか。
評

学校の音楽は、本来、言いたいことや心の中にあるイメージを音や音楽を通して表現する芸術であり、児童の内発的な意欲を高めて表現する教科です。したがって、音楽の学習は子供の「思い」や「考え」を重視し、音楽を愛好することのできる能力や心情の素地を育つように、また、個性が発揮できるように、児童の側に立った学習指導の工夫が求められています。そのためには、活動のあてや目標のもたせ方、児童の興味・関心の把握と生かし方、機能性を押さえた学習内容の構成、多様な学習活動、学習形態の工夫等、具体的な実践の積み重ねが大切です。

本研究は、まさに、このような課題を受けての研究と受け止めることができるでしょう。また、柳原小学校の研究テーマ「一人一人の児童が学ぶ力をつける学習過程の在り方」（市指定研究学校「学習指導の改善」）にそって実践されたものであります。本研究の特色としては次のようなことがあげられます。

1. 主体的に音楽に取り組めるような授業を展開し、子供達が音楽に抵抗なく取り組み、楽しんで活動できるように、音楽科として1単位時間の学習過程を子供の感性や思いを大切にして設定したこと。
2. 子供の側に立って単元レベルでの教科研究を深め、児童の主体的な活動の場を学習過程に位置付けて、自分の思いやイメージ、考えを自由に表現する活動を重視したこと。
3. 音楽の授業で学習したことを、教育祭の学校音楽祭への参加という機会を発表の場としてとらえ子供達に目標を明確に示すことを、そのことを通じて、自分達で曲を決めたり、練習したりして、音の重なり合いの美しさや豊かさを児童自らが感じとれる場として考えたこと。

このような実践を通して「児童一人一人の感性には上下はなく、全く自由である。」ということを実感してとらえる教員の感性は、実践された教員のみが身に付けることができる財宝であると思われます。また、音楽の授業で磨かれた子供達の感性は、今後新しい音楽に出会い、これから音楽との付き合いが深まるものと確信しております。

本研究の内容は、今後の授業の展開や発表の場の工夫・活用、教材研究と学習過程の在り方を考えていくうえで、小学校の音楽を担当する先生のみならず、小・中学校の先生方にとっても大きい参考になるものと思われます。

本研究をお寄せ下さった阿久津先生のご努力に感謝を申し上げ、今後とも継続して実践を積み上げ、研究が更に深められますよう期待して評といたします。